

被災地を訪問して

協同翻訳チーム“Transpinoff” メンバー 泉川知子

これまで私は、Voices from the Field の翻訳者として、現地のボランティアスタッフの記事を翻訳してきました。このたび、震災後初めて被災地を訪問し、自分の目で見る、自分の耳で聞くという貴重な機会を頂き、2011年10月17日から19日の三日間、東北地方を訪れました。

1. 足湯のつぶやき～いつまでもくよくよしたって仕方ないもの

初日は、宮城県亘理町に入り、特定非営利活動法人レスキューストックヤード (RSY) 、日本財団 Road プロジェクトの足湯に同行しました。公共ゾーン仮設住宅には約 500 世帯の被災者の方々が住んでおられました。広い敷地に砂利が敷かれ、びっしりとプレハブの仮設住宅が整列しており、どの通りも同じ様に見えて、「わが家」を探すのは実際簡単ではないなと思いました。その日は、第一集会所で足湯が行われ、わたしは住民の方を足湯にお誘いしたり、足湯の傍らに座らせていただき、傾聴の御供をさせていただいたりしました。

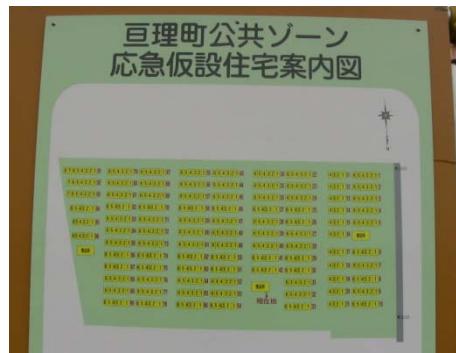
東北の方は「物静かで口数が少ない」と思っていたのは私だけでしょうか。足湯をしながら、片手ずつ揉みほぐしていくのですが、ぽつり、ぽつりと話し始める、そんなイメージを持っていたのですが、実際には皆さん堰を切ったように言葉があふれだすのです。

Wさん(60代)の話が印象的でした。

「震災直後から避難所で被災者の食事づくりをしていたの。500 人分の食事を作るから、そりや大変だよ。私も家は全部だめになっちゃって、避難所に



亘理町応急仮設住宅(上)と案内図(下)



ボランティアによる足湯

いたけどね。いつまでもくよくよしたって仕方ないもの。何かやりたいと思って。今はこここの「いちごっこ」ⁱで調理をして、被災した方には無料で、ボランティアさんには300円でお食事を出してるの。今日は休みだから御馳走できなくて残念だわ。今度来るときには必ず連絡して。“はらこめし”とぬか漬けを作っとくから。おいしいのよ。」そう言って、本当にご自分の電話番号を教えてくださいました。

めいっぱい食事づくりをしてきたことを物語るごつごつとした手でした。自ら被災しながらも、誰かのために働きたい、じつとしていられない、そういう思いを熱く語ってくださいました。被災者でありながら、先頭に立って支援する側にまわって活動してきた方がおられたことに、気づかされました。自分たちの足で、復興に向けて立ち上がりたい。そして支援して下さった方にお返しをしたいという、熱い思いを感じました。

2. 被災者は今何を必要としているのか～“仕事、自立”

翌日七ヶ浜町では、ボランティアセンターのスタッフに、足湯を提供しました。その中で、震災直後から何度も名古屋から訪れ、支援を続けておられるボランティアスタッフのOさんから、感慨深いお話を伺いました。

震災直後からのお話を伺った後で、「今一番被災者の皆さんが必要とされているのは、何だと思いますか。」とお聞きしました。すると、「仕事。自立だね。」ときっぱりおっしゃいました。

「地元の人がどんどん立ち上がり、地元の住民同士が助け合って自立していくように、そういった支援に切り替えていかなければならない。地元の人も何かしたい、仕事がしたい、自立したい、早く以前のような生活に戻りたいと願っている。ボランティアも何が必要なのか、見極めなくちゃ。住民の自立を妨げちゃいけない。」

共感する力、その方々の身になって、刻一刻と必要な支援が変わっていることについて考えることが大切だと思いました。



七ヶ浜町ボランティアセンター

3. 立ち上がりたい。誰かのために力になりたい。わが街を復興させたい。
～壊滅した海沿いの街で

最終日に訪れた岩手県陸前高田市は、太平洋岸に面し、今回の大津波で中心部は壊滅的な被害を受けました。海岸沿いには、江戸時代以来の防潮林で、美しい景勝地の高田松原がありましたが、7万本もあった松林は大津波で壊滅し、たった一本の松だけが奇跡的に生き残り、地元の人たちが復興のシンボルとして「希望の一本松」ⁱⁱと呼んでいます。

仮設の陸前高田市観光物産協会にお勤めで、被災者のMさん(20代)にお話を伺うことができました。

「その日海岸沿いの観光物産センターで仕事をしていましたが、指定の避難場所が分からず、とにかく高台へ逃げました。後で指定の避難場所は体育館だとわかりましたが、体育館に避難した人は皆流れ、亡くなりました。家は流されて、何も見つからないです。でも運良く夫も内陸部で配達の仕事をしていて無事、夫の親も無事だったから、十分だと思っています。みなさんのお世話になっています。どうかこれからも高田をよろしくお願ひします！」

一瞬の選択が生死を分ける過酷さ、それをよく知っているからこそか、大変な思いをされ、今もなお困難の中にあっても、快活に陸前高田復興への強い思いを語る、その前向きな笑顔が胸に迫りました。

今回お会いした被災者の皆さんには辛い逆境の中でも、「立ち上がりたい。誰かのために力になりたい。そしてわが街を復興させたい。」という一筋の「希望」を今しっかりともっておられます。そのお姿に、熱く語る皆さんのはまざしに



「希望の一本松」、対岸より臨む(下)



心を打たれました。復興への道のりはそれぞれ違い、長く険しいと思います。それでも、こんなときにも「希望」が勇気を与え、前を向いて歩かせるのだな、辛い状況の中でも、皆他の誰かの役に立ちたいと願っておられるのだなと、心の強さに感動しました。



4. VfF にできること

七ヶ浜町では、RSY のメンバーが震災後 3 月 25 日には現地入りし、被災者の方々の声をくみ取り、取り残しのないよう心配りをされ、支援を続けてこられました。



七ヶ浜町ボランティアセンターのそばにある RSY の拠点、きずな館（七ヶ浜町）

当初より現地に駐在し、支援されている RSY 浦野愛さんにお話を伺う中で、大きな気づきがありました。

私たちはこれまで現地で活動するボランティアの方々の記事を翻訳し紹介し、登録モニターから数々の励ましのコメントを頂いてきました。そのことを浦野さんにお伝えしたところ、「それがどんなに現地ボランティアスタッフの励ましになることか！」と言って下さいました。モニターから届いた声を翻訳して現地に届けることができたら、世界のモニターと現地のボランティアをつなぐことができる。さらに現地ボランティアがモニターに返事をするかもしれない。そのような広がりを思い浮かべたら、これこそ、私たちにできることだと、急に視界が開けたような思いがしました。



RSY では若いスタッフの方々が、いつも笑顔で住民の方々を迎える、日々地道に支援を続けておられます。また、少しでも力になりたいと、仕事の休みを取って、遠くからボランティアバスに乗り、駆けつけたボランティアの方々がいます。世界で見守るモニターの声を届けることが、彼らの大きな支えになること、私たちは、その役割を担っているのだと思いました。

時がたつにつれて、震災のニュースが報道されることも少なくなり、被災地から離れてごく通常の生活をしていると、被災した方々が今何を思い、どうされているのか、日常では想像すらできないのが現実だと思います。言葉で伝えるのは難しい、現地を訪れて、その難しさを改めて思い知らされながらも、少しでも想いを共にし、伝え続けたいと改めて感じました。

i 「亘理町いちごっこ」：宮城県亘理町民によるボランティアグループ。仮設住民とボランティア向けに食事を提供している。亘理町はいちごの名産地であり、いちごっこはいちごから名づけられた。今回の大津波では収穫シーズン目前のいちごが流され、全滅した。

ii 「希望の一本松」を生かそうと、様々な保護活動が続けられてきたが、2011年12月12日、財団法人「日本緑化センター」（本部 東京都）によって、根腐れのため一本松は枯死したと発表された。しかし、万一のために、一本松から採取し接木していた枝のうち、4本が順調に育ち、命を継いでいる。